

佐藤琢磨、二度目の世界チャンレンジ



2008年、レーシングドライバーの市民榮譽彰に輝いた。自動車レースの世界最高峰であるF1のドライバーとして、過去日本人では二人しか達成していない「表彰台獲得」の功績をはじめ、国内外での評価が極めて高いことがその理由だった。佐藤選手は和光高等学校卒業後の早稲田大学在学

中、19歳の時に一念発起、自転車競技からモータースポーツの世界に転身すると、驚異的なスピードでステップアップ。2001年にイギリスF3でチャンピオンを獲得すると同時に、F1の登竜門といわれるF3マカオGPを制し、翌年F1デビューを果たした。何人もの日本人ドライバーがF1に参戦したが、「王道」を経ての参戦は佐藤選手だけ。それだけに期待も大きく、また何よりもその魅力的な走りが、過去の誰よりもファンに支持された。しかし市民榮譽表彰受賞の直後のこと、佐藤選手はチームの撤退にともない、F1のステージから降りることになってしまった。

その佐藤選手が今季、2年ぶりにサーキットに復帰したことをご存知だろうか。ステージは、モータースポーツの世界ではF1と双壁を成す、アメリカのインディカー・シリーズ（IRL）だ。インディはトップスピードではF1をはるかに凌ぎ、バトルの激しさも比ではない。またレースはオー

バルと呼ばれる独特の楕円形状のサーキットで行なわれることが多く、マシンの形状は似ているものの全く異質のもの。つまり、もうひとつの「世界一のモータースポーツ」だと言える。過去何人かのドライバーが両方に挑戦したが、両方でトップに君臨した例は少ない。F1で表彰台を獲得した

とはいえ、同じように活躍できる保証はどこにもないのである。そんな場所を新たなチャンレンジの場として、佐藤選手は選んだ。

そして移籍直後のテスト走行では、わずかに2回目のドライブながら総合6位の成績をマークし順応性の高さを見せるが、3月の開幕戦ではスタート直後にクラッシュを喫してしまい、デビュー戦はほろ苦いものとなる。その後もここまで5戦を戦い、最高順位は18位（5月22日現在）。結果からは「苦戦」としか伝わらない。しかし内容をよく見れば、第3戦では予選で6位を獲得。また第5戦では初のオーバル走行でありながら、最終的には不運なアクシデントで終了したものの上位と堂々のバ

トルを演じている。最終順位から見えてこないが実は、インディでも同じく果たされていない日本人による優勝に向かい、着実に歩を進めているのである。

一時期のブームが去り、国内では新聞の片隅で結果が知らされるのみとなったモータースポーツ。メジャースポーツでは世界の舞台で戦う日本人選手を誰もがもてはやすが、同じように町田市出身の佐藤選手もまた、日本を背負い世界に挑み続けていることを忘れてはならない。コラム掲載にあたり、佐藤選手からメッセージが届いた。「町田市の皆さん、いつもたくさんの方の応援をありがとうございます。今年は新天地アメリカにて、自分の未来を切り開くために新たな挑戦に挑んでいます。思い通りに行かないことも多々ありますが、学べることもあるというのは幸せなこと。No Attack No Chanceの精神でこれからも全力で走り続けます」。いつか佐藤選手が世界の頂点に立つ日を、心待ちにしても良さそうだ。

9月にはIRLが日本で開催（栃木県ツインリンクもてぎ/第16戦、19日決勝）。会場やテレビで応援することが出来る。凱旋レースに強い佐藤選手だけに期待大。

